

(論 文)

子育てにおけるサポート・ネットワークと ソーシャルメディア利用の地域的差異に関する一考察

天 笠 邦 一

A Study of Regional Difference in Child-rearing Support Networks and Social Media

Kunikazu AMAGASA

Social Media use has become widespread in recent years. This paper investigates whether there is a regional difference in social media use. The author focuses on the relationships between using social media and child-rearing support networks.

In order to understand the relationships, the author conducted a questionnaire survey via the internet. Analyses of 723 responses received from women aged 18 to 39 living in Kanto region who were rearing children revealed the following 3 findings. 1) In less urbanized areas, social media tended to be used for maintaining ties among families, relatives or people living in the local community. 2) In more urbanized areas, there was no significant relationship between social media usage and support networks. 3) In highly urbanized areas, social media usage had the closest relationships with support networks and tended to contribute to the construction and maintenance of more diverse social networks.

Key words: social media (ソーシャルメディア), support network (支援ネットワーク), regional difference (地域差), child-rearing (子育て)

1. はじめに

本研究は、現代の日本社会における日常生活の中で一般的に普及しているスマートフォンなどのモバイルメディアと、そのコンテンツの一つとして確固たる地位を築いたソーシャルメディア利用の地域差について、個人が持つサポート・ネットワークとの関係を元に検証する。

モバイルメディアの普及が日本において本格的に始まり20年強、ソーシャルメディアは、その普及から10年余りが経った。若い世代におけるスマートフォンの利用率は平成28年度の全国調査で20代は92.4%、30代は87.4%と非常に高い数字を示し(総務省2017)、彼らにとって日常生活をマネジメントする上で欠かせない道具となっている。

しかし、同じ道具が日本中で普及したとしても、それがすべての地域で同じように使われているとは限らない。木暮(2015)は、地域ごとのスマートフォンの普及格差は、高齢化率や所得の差以上に、地域における主要な産業形態や通勤手段などとの関連が深いと指摘している。この指摘は、モバイル/ソーシャルメディアの利用目的や役割の地域差の存在を、間接的に示唆するものである。

特に、日常生活において個人の存在を支えるつながりの一つであるサポート・ネットワークの形成と、モバイル/ソーシャルメディア利用との関連性における地域差については、注意深い吟味が必要だ。なぜなら、個人が社会的ネットワーク以外から獲得できる社会的資源は、商業的・公的な各種サービスが充実した都市部の方が一般的に豊富であり、こうし

たサービスの補完的役割を果たすパーソナルなサポート・ネットワークの役割は、都市部と地方では変化すると考えられるからだ。そして必然的に、そのネットワークを構築・維持・管理するために活用されるモバイル／ソーシャルメディアの利用形態も、都市部と地方では異なると考えられる。

2. 研究目的

本研究では、モバイル／ソーシャルメディアの利用と個人が持つサポート・ネットワークとの関連性について、地域における都市度と合わせて考察する。また、サポート・ネットワークを考えるにあたって、多くの支援が必要なライフステージにある人を研究対象にする方が、より豊富な知見が得られる。そこで本研究では、特に日常生活において多くの社会的資源が必要になり、メディアの利用も盛んだと考えられる「子育て期」にある母親たちに着目し、彼女たちが持つサポート・ネットワークの形態と、モバイル／ソーシャルメディア利用との関連性について、都市度を軸とした調査分析を行う。

3. 概念的枠組み

上述した研究目的を受けて、本章では関連する先行研究を整理し、より具体的な調査の設計を行う。

本研究の先行研究については、3つの流れがある。1つ目の流れが、Fischer (1982) や Wellman (1979) の都市社会学の流れを汲む、都市におけるパーソナル・ネットワークとその社会的役割に関する研究。2つ目の流れが、子育てという社会的実践を前提にした、サポート・ネットワークとしての社会的ネットワークに関する研究。3つ目が、パーソナル・ネットワークやサポート・ネットワークの形成とメディア利用との関連に関する研究である。

3.1. 地域性とパーソナル・ネットワーク

1つ目の流れであるパーソナル・ネットワークの社会的役割に関する研究については、国内では野沢慎司が先駆的な取り組みを行ってきた。野沢 (1995) は山形県山形市、埼玉県朝霞市という都市度の異なる2地域でのパーソナル・ネットワークの形質と機

能の差異に関する調査を行った。野沢はこの分析の中で、都市度の高い朝霞市において、サポートコミュニティが地理的に分散し築かれている点を指摘し、Fischer の下位文化理論や Wellman のコミュニティ解放論での知見が大枠では日本に当てはまることを示している。この研究の流れを汲み、パーソナル・ネットワークの形質を都市度の違いからとらえたものに原田・杉澤 (2014) の議論があり、その中でも、都市度の高い地域におけるネットワークの地理的分散が追認されている。

3.2. 子育てにおけるサポート資源としてのパーソナル・ネットワーク

子育てにおけるサポート・ネットワークは長く研究対象とされてこなかった。そもそも旧来、子育ては家庭の中でも特に母親の仕事であると考えられており、母親が持つ個人的な社会的ネットワークの重要性は多く主張されてこなかった。子育て時の支援元として、母親個人のネットワークの存在が注目され始めたのは、関井らとその萌芽的研究を行った頃からである。関井ら (1991) は、子育てに必要な支援を、手段的援助、情動的援助、情緒的援助に分け、それぞれがどのようなネットワークから提供されているのかを分析した。久保 (2001) は働く母親に焦点を当てて、同様の分析を行っている。さらに松田 (2008) は、これらの研究を総括しつつ、社会的ネットワークの質や構造的な要素を含めた分析を行い、質の高いサポートを受けるためには、「中庸」なネットワークを構築・維持することが重要であると述べている。また、ネットワークの地域差に関する分析も行っており、地域や都市度によって、子育てに最適なネットワークの形質が変わることも指摘している。

3.3. メディア利用とパーソナル・ネットワーク／サポート・ネットワーク

3つ目の流れとして挙げられるのが、本論における主要なテーマでもある、メディア利用とパーソナル・ネットワーク、サポート・ネットワークとの関連性に関する研究である。

パーソナル・ネットワークとメディア利用の関係については、ソーシャルメディアの機能そのものと関わる問題であり、先行研究も多い。しかし、ソーシャルメディア上のパーソナル・ネットワークに限って分析するアプローチが多く、対面的なネットワークも含めて分析を行っている研究は限定的である。その中で、最初期に行われた実証的研究として挙げられるのが、辻（2003）の携帯電話の電話帳メモリを活用した研究である。また、宮田（2006）は地域におけるメディア利用とパーソナル・ネットワークとの関連性を、山梨県甲府市において実施した質問紙調査を元に分析している。しかし、宮田の調査も一地域に限定したものであり、さらにメディアの状況も当時と現在とは大きく変わっているため、その点の考慮は必要である。辻（2010）は、都市部と地方部での比較調査を行っているが、メディアの利用と社会的ネットワークについては分けて論じられている。近年では、岩田（2014）の議論が、特に若者に特化したものではあるが、友人関係の「多層化／重層化」を指摘しており、興味深いものとなっている。

一方で、社会的ネットワークの中でも、日常生活における支援元となるサポート・ネットワークとメディア利用との関連を論じているものはほとんどない。数少ない研究の中では、天笠（2010）が効果的なサポート・ネットワークを築く上でのメディア利用の有効性を検証している。さらに天笠（2016）は、参与観察などの質的な手法を用いて、メディアを活用してサポート・ネットワークを築く上での様々な障壁について記述を行っている。しかし、これらの天笠の研究はいずれも首都圏郊外地区を対象にしており、地域間の比較などは行われていない。

3.4. リサーチクエスチョン

これまで行われてきたサポート・ネットワークの構築・維持と、モバイル／ソーシャルメディア利用との関連性を分析する研究は、特定の地域性を前提に考察がなされてきた。しかし、効果的なサポート・ネットワークの形質は、都市度によって変わることが上記の先行研究によって指摘されており、当然、

都市度が異なればモバイル／ソーシャルメディアの役割も変化するはずである。以上の問題意識から、本論では天笠（2010）による各種サポート・ネットワークの規模と信頼性の指標を用いて、下記2点のリサーチクエスチョンについて検証を行う。

- 1) 各種サポート・ネットワークの規模とモバイル／ソーシャルメディア利用との相関関係に都市度による違いはあるか。
- 2) 各種サポート・ネットワークに対する信頼感とモバイル／ソーシャルメディア利用との相関関係に都市度による違いはあるか。

以上のリサーチクエスチョンの検証を通じて、都市度の異なる地域におけるサポート・ネットワークの形態とモバイル／ソーシャルメディアの利用について、考察を行う。

4. 調査概要

本研究では、2017年2月22日から3月4日にかけて、株式会社ジャストシステムが提供するオンライン質問紙調査のプラットフォームである「Fastask」上にて行った質問紙調査のデータを分析の対象とする。作成した質問紙調査は、同社のリサーチパネルで、「関東地方在住」「親権を持つ子どもと同居している」「18歳から39歳の女性」という条件を満たす人々に配信された。結果、723サンプルの回答を得て、そのうち、回答の合理性に問題のない680サンプルが分析の対象となった。なお、有効回答者の平均年齢は33.9歳（標準偏差3.75歳）、平均の世帯年収は627万円（標準偏差307万円）、未婚率は6.9%であった。

5. 調査結果

5.1. 分析に用いるエリア分け

都市度の違いによるモバイル／ソーシャルメディアの利用とサポート・ネットワークの関係性を検討するため、地域の都市度を評価し分類する指標として、人口密度を利用した。

人口密度を利用した都市度の定義に、国勢調査などでも用いられる最も一般的なものとして「人口集中地区」がある。国勢調査における基本単位区内の

人口密度が4,000人/km²以上で、それらの隣接した地域の人口が5,000人以上の時、その地区は「人口集中地区」として国勢調査では設定されている(総務省統計局 1996)。一般的にこの人口集中地区は、英訳語(Densely Inhabited District)の頭文字をとり、DIDと呼ばれることが多い。

本研究では、調査設計上、国勢調査の基本区単位での居住地の取得はできなかったため、このDIDの基準を厳しめに適用し、基礎自治体(市区町村)内の人口密度が4,000人/km²以上の地域を、都市としての側面がある地域(エリア2:都市度-中)とした。これより少ない(人口密度4,000人/km²未満)市区町村を、比較的都市度の低い地域(エリア1:都市度-低)と位置付けた。また、人口密度が4,000人/km²以上の市区町村の中でも、人口密度が10,000人/km²を超える、超人口集中地域(市区町村)を、より高度な都市インフラを持つ地域(エリア3:都市度-高)とした。

この基準を地図上にプロットしたものが図1である。図1内の①がエリア1(都市度-低)、②がエリア2(都市度-中)、③がエリア3(都市度-高)を示す。

エリア3(都市度-高)は、ほぼ山手線の内部とその外延部に集中している。一部、神奈川県横浜市

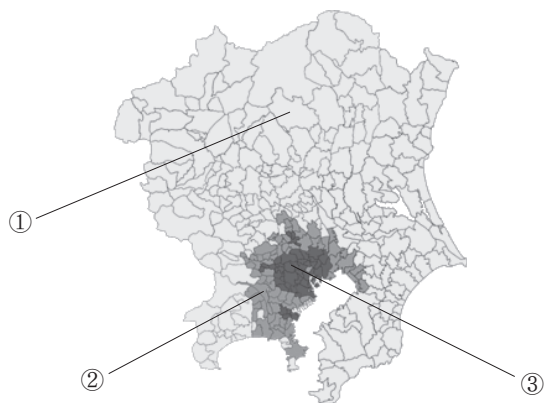


図1 分析に用いる3エリア

表1 エリア1～3の定義とサンプル数

	自治体内人口密度	地図	サンプル数
エリア1 (都市度-低)	4,000人/km ² 未満	①	223
エリア2 (都市度-中)	4,000人/km ² 以上 10,000人/km ² 未満	②	263
エリア3 (都市度-高)	10,000人/km ² 以上	③	194

と埼玉県さいたま市の中心部が、飛び地的に存在するのみである。エリアの大半は、東京メトロ(地下鉄)での移動が苦なく行える地域ともとらえられよう。これらの地域に居住しているのは、194サンプルであった。

エリア2(都市度-中)は、神奈川県西部と、埼玉県最南部、千葉県最西部に集中し、エリア3を取り巻くように存在している。エリア3と接しているエリア2の地域としては東京都国立市、埼玉県川口市、神奈川県川崎市、千葉県浦安市などがある。日常生活がバスなども含めた公共交通機関を活用した移動でほぼ完結するエリアであり、この地域に居住していたのは263サンプルであった。

エリア1(都市度-低)は、それ以外の調査エリアである。エリア2と接しているエリア1の地域としては、東京都八王子市、埼玉県春日部市、神奈川県平塚市、千葉県柏市などがある。国道16号線が通る付近の地域であり、公共交通機関のみでは何かしらの不便を感じるエリアである。この地域に居住していたのは223サンプルであった。

都市度の異なる以上の3つのエリアで構成される地域において、母親たちのメディア利用の現状とサポート・ネットワークの機能について検証を行った。

5.2. エリアごとの基本属性

以下では、上述した3つのエリアごとの質問紙調査の回答結果をまとめる。

5.2.1. 家族の状況

表2は、個人属性である年齢と基本的な家族の状況を示す世帯年収・同居する子どもの数・末子年齢・未婚率についてエリアごとにまとめた結果である。未婚率は、その差異を検証するために χ^2 検定を行い、それ以外のデータについては、分散分析を行った。

協力者(母親)個人の年齢と、同居する子どもの数、未婚率については、エリアごとに有意な差はみられない。差がみられるのは世帯年収と、末子年齢である。世帯年収はエリア1と2では35万円強、エリア2とエリア3では150万円弱ほど差異がある。この結果は、都市度が高いほど家庭としての収入水準

表2 エリアごとの調査協力者家族の基本的状況（未婚率以外は平均値）

	N		年齢 (歳)	世帯年収 (円)	同居する 子どもの数(人)	末子年齢 (歳)	未婚率 (%)
エリア1: 都市度-低	223	Mean	33.8	5,595,855	1.73	3.72	6.28
		SD	3.9	2,422,203	0.71	2.85	
エリア2: 都市度-中	263	Mean	33.9	5,951,754	1.76	3.79	6.84
		SD	3.6	2,682,107	0.79	2.75	
エリア3: 都市度-高	194	Mean	34.1	7,436,782	1.75	3.21	7.73
		SD	3.8	3,801,281	0.92	2.68	

検定

**

†

**1%水準で有意, *5%水準で有意, †10%水準で有意

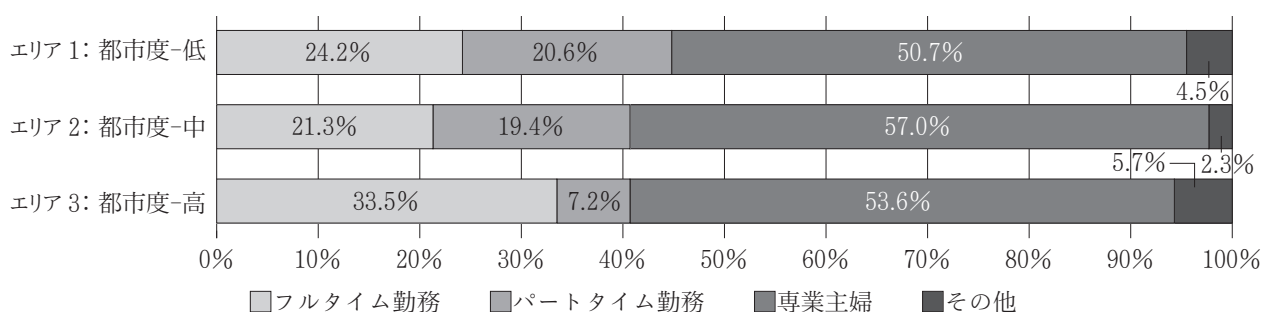


図2 エリアごとの調査協力者の就業状況

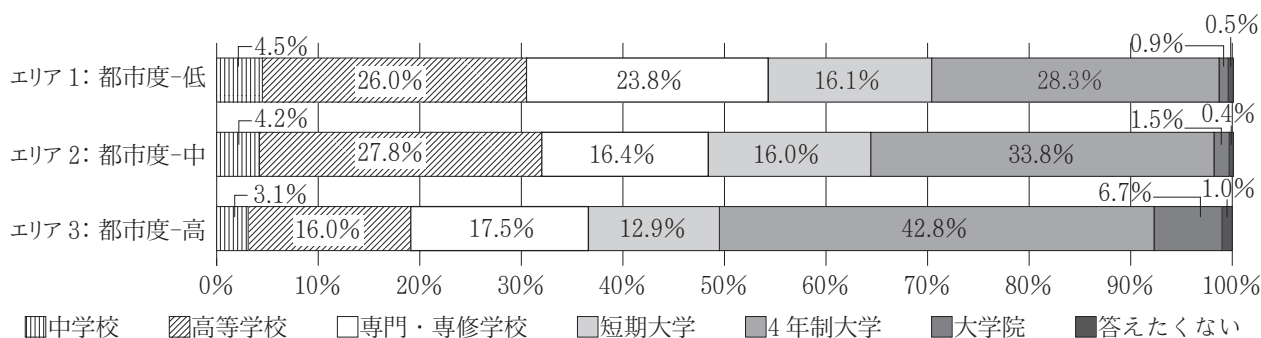


図3 エリアごとの調査協力者の学歴の状況

が上がることを示しており、都市度が高いエリア3は世帯単位での収入水準が特に高いことがわかる。また、末子年齢は10%水準で有意な差を示しており、エリア3のみが0.5歳ほど若い結果になっている。

5.2.2. 就業状況

図2は、3つのエリアの就業状況の差異を示している。専業主婦の割合に着目すると、エリア2で若干高い傾向がみられるが、3エリアで大きな違いは確認できなかった。一方、フルタイム勤務は特にエリア2で割合が低く、エリア1, 2ともに、エリア3の33.5%とは、10ポイント前後の開きがある。

このデータは、表2で示された世帯収入の有意な

差を合理的に説明している。すなわち、エリア3ではフルタイムの共働きによりダブルインカムになっている家庭が多く、それが平均値を引き上げていると考えられる。給与水準もエリア3が最も高いと思われるが、エリア1と3を比べた時の200万円弱もの大きな差は、特に日本においては、給与水準だけでは説明ができない。この就業状況の差が、大きく関わっているとみるべきであろう。

5.2.3. 学歴の状況

図3は、3つのエリアそれぞれにおいて、調査協力者が最後に卒業した学校の種別をまとめたものである。エリア1では4年制大学卒の割合が28.3%で

あるが、エリア2では33.8%であり、エリア3になると42.8%まで上昇する。また、高等学校卒と専門・専修学校卒を合わせた数字も、エリア1では49.8%、エリア2では44.2%、エリア3では33.5%となっている。これをみると、都市度が上がるほど明確に高学歴になっているのがわかる。こうした学歴の高さがフルタイム就労につながり、さらに世帯年収の高さにつながっている可能性が高いと考えられる。

5.2.4. サポート・ネットワークの状況

図4は、各エリアにおいて、常に連絡が取れる人数をつながりの属性ごとにまとめたものである。夫以外の親族（血縁）、ご近所の知り合い（地縁）、ママ友（地縁）、同僚（職縁）、幼馴染（学縁・地縁）、ネット上の知人、専門家（医師など）の7項目の調査結果を示している。

一般的には、都市度が高い地域は人々のつながりが薄く、地方に出れば出るほど濃く豊かな関係性が

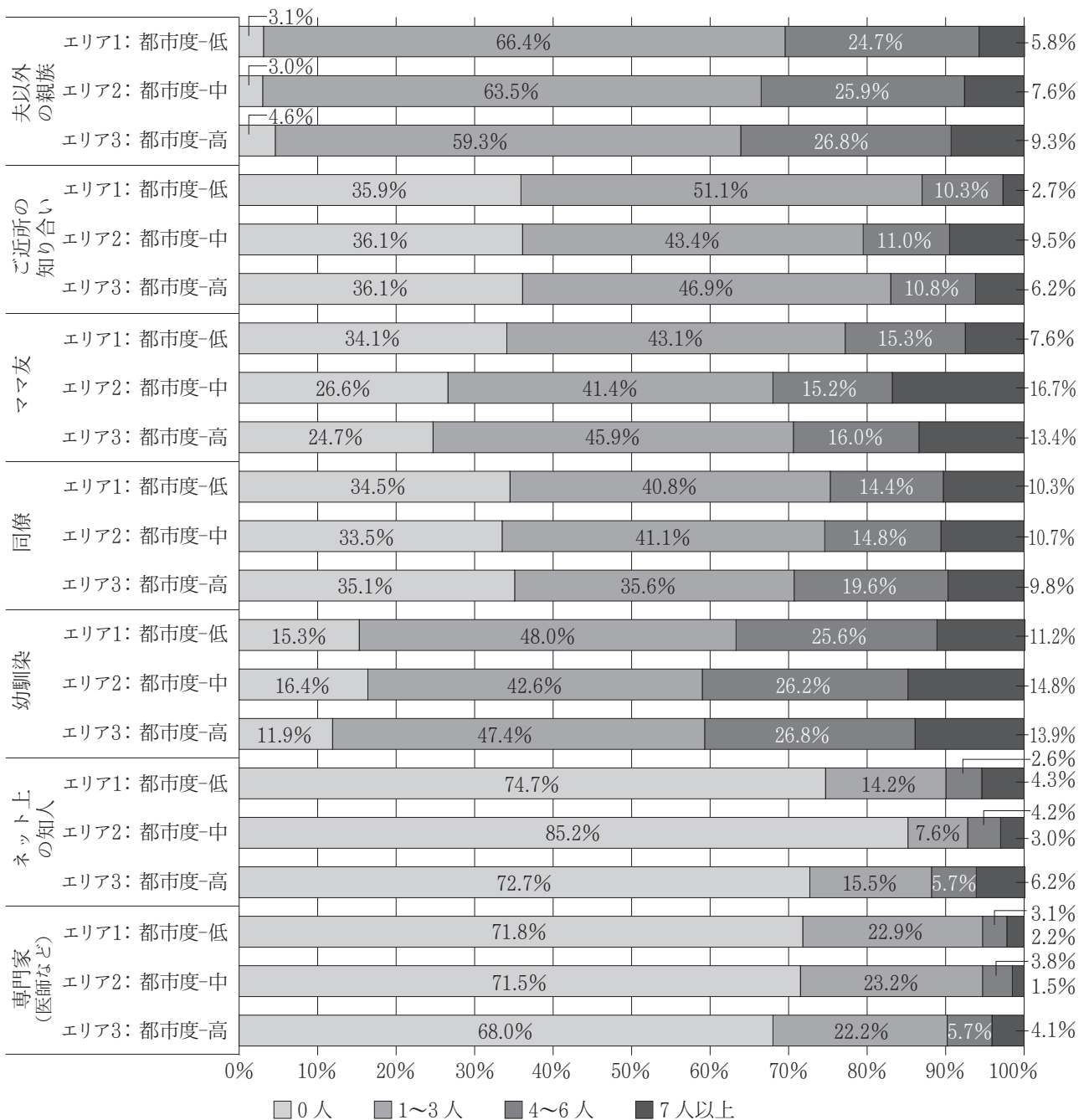


図4 エリアごとの各種サポート・ネットワークの規模

残っていると考えがちであるが、今回の調査結果は、それとは逆の結果を示している。すなわち、ほとんどすべてのつながりにおいて、都市度が低いエリア1のネットワーク規模が最も小さく（4人以上のネットワークとなっている割合が少なく）なっている。例外の一つとして着目すべきはネット上のつながりであり、これは都市度が中程度のエリア2が最も規模が小さくなっている。

エリア2とエリア3でどちらの規模が大きくなるのかは、つながりの属性によって異なっており、ご近所の知り合い、ママ友、幼馴染といった地域性の高いつながりは、都市度が中規模のエリア2が最も規模が大きく（4人以上のネットワークとなっている割合が最も高く）、それ以外の親族や同僚、専門家といったつながりは、都市度が高いエリア3が最も高い。

これらの結果が導かれた要因を正確に理解するためには、より詳細な調査が必要であるが、仮説の一つとして、日常生活における物理的に接触可能な人数がネットワークの規模に直接影響していることが考えられる。当然、人口密度が高く都市度が高い地域ほど、日常生活において物理的に接触可能な人数は増える傾向にある。また、公共交通機関が高度に発達したエリア3では、容易に自らが住む地元から離れることが可能になるため、生活圏が広域化しやすいが、エリア2では、エリア3ほど移動が容易ではないため、徒歩を中心とした生活圏を築きやすい。こうした地区ごとの特徴が、エリア2における地域性の高いつながりの規模の大きさや、エリア3における血縁や職業縁のつながりの規模の大きさに結び付いているのではないだろうか。

一方で、表3に示したように、様々な属性の人た

ちをどれくらい頼ることができるかという、エリアごとの各種サポート・ネットワークへの信頼感¹については、各地域で有意な差はほとんどみられない。唯一、有意差が確認できるのは、対面的な関係ではなく情緒面や情報面などの限られたサポートしか提供できないネット上の知人の項目のみである。

つまり、都市度が高い方がネットワークの規模が大きいからと言って、サポート・ネットワークの機能性の充実には直接的にはつながっているわけではないと考えられる。都市度の低いエリア1は、量よりも、一つ一つのつながりの質が重要であり、都市度の高いエリア3においては、一つ一つのつながりから得られるサポートの質が、個人の多忙などもあり確保しにくい。その分、つながりの量でカバーをしているのではないだろうか。

なお、この分析においては、それぞれのつながりの信頼度を、「まったく頼りにならない（1点）」「頼りにならない（2点）」「頼りになる（3点）」「とても頼りになる（4点）」で計算し、その平均値のエリアごとの差異を分散分析にて検定している。

5.2.5. メディア利用の状況

表4は、本論のもう一つの論点であるメディアの利用について、エリアごとにその必要度をまとめたものである。メディアの利用としては、電話に加えアプリケーションでの通話も含めた「音声通話」、パソコン・携帯電話・スマートフォンなどの各種端末から利用する「E-mail」、LINEなどのアプリケーションでテキストをやり取りする「メッセージング」、さらには「Twitter」「Facebook」「Instagram」などの各種ソーシャルメディアの閲覧状況などを調

表3 エリアごとの各種サポート・ネットワークへの信頼感

	N		夫・ パートナー	両親	ご近所の 知り合い	同僚	幼馴染	ネット上 の知人	専門家 (医師など)
エリア1: 都市度-低	223	Mean	2.86	2.89	1.99	1.82	2.03	1.38	2.19
		SD	0.96	0.93	0.86	0.81	0.88	0.66	0.88
エリア2: 都市度-中	263	Mean	2.76	2.89	2.10	1.73	2.11	1.34	2.14
		SD	0.91	0.89	0.94	0.87	0.89	0.60	0.87
エリア3: 都市度-高	194	Mean	2.85	2.86	2.14	1.77	2.20	1.53	2.15
		SD	0.90	0.88	0.96	0.87	0.94	0.82	0.87

検定

*

**1%水準で有意、*5%水準で有意、†10%水準で有意

表4 エリアごとの各種メディアの必要度

	N		音声通話	E-mail	メッセージング	Twitter 閲覧	Facebook 閲覧	Instagram 閲覧
エリア1: 都市度-低	223	Mean	2.37	2.22	2.90	1.40	1.64	1.42
		SD	0.91	0.82	0.93	0.74	0.82	0.76
エリア2: 都市度-中	263	Mean	2.29	2.35	2.93	1.48	1.58	1.41
		SD	0.84	0.85	0.91	0.87	0.86	0.76
エリア3: 都市度-高	194	Mean	2.44	2.42	2.91	1.58	1.74	1.61
		SD	0.93	0.87	0.91	0.94	0.94	0.99
検定			*			*		

**1%水準で有意, *5%水準で有意, †10%水準で有意

べている。

これらのメディアの利用状況の指標としては、「利用していない(1点)」「たまに利用している(2点)」「よく利用する(3点)」「生活に欠かせない(4点)」としてポイント化した。そして、そのエリアごとの平均値の差異について、分散分析を用いて検定を行った。

この結果をみると、メディアの利用状況について、地域ごとに有意な差はほとんどみられないことがわかる。特にメッセージングについては、数値もほぼ変わらない。また、音声通話やTwitterの閲覧、Facebookの閲覧については、数値上のわずかな違いはみられるが、有意な差に至っていない。

有意な差が確認できるのが、E-mailの利用とInstagramの閲覧である。この要因も正確に理解するためには、さらなる詳細な調査を行わなければならないが、一つの可能性として、就業形態の差異がE-mailの利用の差に関係していると考えられる。先に述べたように都市度が高いエリア3の地域ではフルタイムの共働が多い。ビジネスにおける現状最も主要な連絡手段はE-mailであり、それがこの結果に反映されているように見える。また、Instagramについては、都市度が低いと被写体になるものやイベントがそもそも少なく、それがこの結果に影響しているかもしれない。

6. 考 察

結果で示したデータを用いて、本論のリサーチクエスチョンである1) 各種サポート・ネットワークの規模とモバイル/ソーシャルメディア利用との相関関係に都市度による違いはあるか、2) 各種サポ

ート・ネットワークに対する信頼感とモバイル/ソーシャルメディア利用との相関関係に都市度による違いはあるか、について考察する。

本論で設定した3つのエリア(都市度-低・中・高)ごとのメディア利用と各種サポート・ネットワークの規模及びその信頼度について、ピアソンの相関分析を行った結果を表5, 6に示す。表5, 6において、セルが濃い灰色で塗りつぶされ、白抜き文字になっている部分は検定が1%水準で有意だった項目、薄い灰色で黒文字となっているのが5%水準で有意だった項目である。なお、ネットワーク規模については、各選択肢の中央値を用いて比例尺度化し、分析を行った。

6.1. サポート・ネットワークの規模とメディア利用

まず、リサーチクエスチョンの一つ目である、各種サポート・ネットワークの規模とモバイル/ソーシャルメディア利用との相関関係に都市度による違いはあるかについて考察する。表5をみると、統計的有意となった相関分析は、都市度が高いエリア3の地域が最も多く(11パターン)、次いで都市度の低いエリア1(7パターン)、エリア2(5パターン)の順となっている。また、一般的に弱い相関があるといえる「相関係数の絶対値が0.2以上」である分析パターンの数は、やはり同様に都市度の高いエリア3(6パターン)、続いて都市度の低いエリア1(2パターン)の順となっている。中程度の都市度であるエリア2には、相関係数が0.2を超える分析パターンは1つもなかった。

今回の分析では、全般的に相関係数が低く、個別の分析ではあまりはっきりとした結果は出ていない。

表5 エリアごとのメディア利用と各種サポート・ネットワーク規模の相関関係

		ネットワーク規模					専門家 (医師など)
		夫以外の 親族	ご近所の 知り合い	ママ友	同僚	幼馴染	
エリア1 (都市度-低)	音声通話	0.057	0.142	0.146	0.123	0.066	0.095
	E-mail	0.035	0.207	0.222	0.036	0.026	0.120
	メッセージング	0.075	0.025	0.175	0.149	0.174	-0.098
エリア2 (都市度-中)	音声通話	-0.017	0.034	0.044	0.082	0.142	0.056
	E-mail	-0.061	0.107	0.097	0.021	-0.016	0.157
	メッセージング	0.033	-0.117	0.175	0.102	0.181	0.010
エリア3 (都市度-高)	音声通話	0.185	0.033	0.166	0.268	0.116	0.164
	E-mail	0.104	0.092	0.148	0.215	0.017	0.232
	メッセージング	0.232	0.038	0.190	0.225	0.274	-0.064

表6 エリアごとのメディア利用と各種サポート・ネットワークへの信頼感の相関関係

		日常生活で頼りにしている度合い					専門家 (医師など)
		夫・ パートナー	両親	ご近所の 知り合い	同僚	幼馴染	
エリア1 (都市度-低)	音声通話	0.101	0.340	0.018	-0.018	0.132	-0.020
	E-mail	0.217	0.169	0.113	0.176	0.197	0.125
	メッセージング	0.150	0.222	0.060	-0.049	0.103	0.029
エリア2 (都市度-中)	音声通話	0.010	0.029	0.055	0.156	0.122	0.048
	E-mail	0.008	0.063	0.109	0.043	0.077	-0.046
	メッセージング	0.039	0.117	0.035	0.076	0.189	0.094
エリア3 (都市度-高)	音声通話	0.212	0.222	0.163	0.139	0.265	0.204
	E-mail	0.211	0.256	0.258	0.247	0.225	0.236
	メッセージング	0.250	0.178	0.079	0.079	0.190	0.175

一方で全体の傾向としてみえてくるのは、サポート・ネットワークの規模とモバイル／ソーシャルメディア利用の関連性が最も高い地域は、最も都市度が高いエリア3だということである。続いて、限定的に関連しているのが都市度の低いエリア1であり、中程度の都市度であるエリア2においては、ほとんど関連していないと考えられる。

都市度の高いエリア3において、「幼馴染×メッセージング」という例外はあるが、「夫以外の親族×メッセージング」「同僚×音声通話／E-mail／メッセージング」「専門家×E-mail」といった「地縁」以外のつながりに、相関係数が0.2を超えるパターンが集中している点は興味深い。一方で、都市度の低いエリア1では、相関係数0.2を超えるパターンは、「ご近所の知り合い×E-mail」と「ママ友×E-mail」しか存在せず、これらはいずれも地縁的なつながりである。

6.2. 各種サポート・ネットワークへの信頼感とメディア利用

次に、リサーチクエスションの二つ目である、各種サポート・ネットワークに対する信頼感とモバイル／ソーシャルメディア利用との相関関係に都市度による違いはあるかについて考察する。3つに分けたエリアごとに、各種サポート・ネットワークへの信頼感とメディア利用との相関の分析を試みた表6をみると、検定が有意になるパターンが一番多いのは、ネットワーク規模の時と変わらず、都市度の高いエリア3(15パターン)である。続いて、都市度の低いエリア1(9パターン)が多く、都市度の低いエリア2(3パターン)が最も少ない。

相関係数が0.2以上になる分析パターンが多いのも、都市度の高いエリア3(11パターン)であり、続いて都市度の低いエリア1(3パターン)となっている。都市度が中程度のエリア2には、相関係数が0.2以上となるパターンはなかった。

この結果から、最もメディア利用とサポート・ネットワークとの関係性が深いのがエリア3であり、続いて都市度の低いエリア1で限定的に関係しており、ほぼ関係していないのが、都市度が中程度のエリア2であるという、ネットワークの規模と同様の傾向が示された。

より詳細に相関が出ているパターンをみると、さらに興味深いことがわかる。都市度の低いエリア1では、「夫・パートナー×E-mail」と「両親×音声通話／メッセージング」で相関係数が0.2以上となっており、配偶者や血縁など家族的なつながりへの信頼感とメディア利用に相関が表れている。一方で都市度の高いエリア3では、特にE-mailの利用が顕著な傾向を示しており、ここで挙げているすべてのつながりへの信頼感と弱いながらも正の相関が表れている。また、音声通話もご近所の知り合いと同僚への信頼感以外の項目では正の相関関係がみと取れる。すなわち、都市度の高いエリア3では、「様々な種類のネットワークと信頼感のあるつながりを築くこと」と、「音声通話やE-mailを利用する従来型の通信メディアの利用」との間に有意な関係性がみと取れるのである。踏み込んだ言い方をすれば、都市度が高い地域（エリア3）に住む人は、従来からあるメディアを活用して信頼感のある質の高いサポート・ネットワークを多様に形成していると考えられる。

6.3. 考察のまとめ

上記の考察から、本論で人口密度を基準にして分けた3つのエリアごとに、メディア利用とサポート・ネットワークの関連性が異なることが明らかになった。

まず、最も都市度が低いエリア1では、メディアの利用とサポート・ネットワークとの間には限定的な関係があった。モバイル・ソーシャルメディアは、地縁的なご近所の知り合い・ママ友との付き合いを維持することに寄与し、配偶者や血縁など家族の信頼関係をつないでいた。すなわち、場所に関係なく様々な人とつながることを可能にするはずのモバイル／ソーシャルメディアが、むしろ社会・物理的に近い距離にある人とのつながりを創り出し、維持し、

機能させていた。これには「地縁の距離」の問題が背後にあると考えられる。密集度の低いエリア1における「近い・近所」は、都市度が高い地域に比べ、お互いの距離が離れており、拠点になるような場所における関係性の集約度も低い。ゆえに、地縁的なつながりといっても、メディアを用いなければ維持することが難しいのではないだろうか。また、エリア1では、ネットワーク規模が他の地域と比べても小さく、サポートを得る時には、どうしても少数精鋭になりがちである。ゆえに、より確実にサポートを得られる家族との関係を、より質が高い状態で維持することが求められ、そのためにメディアが活用されているのではないだろうか。先に述べた野沢（1995）の山形県山形市における調査結果でも、こうした地域において地理的に分散した親族からのサポートの重要性が指摘されているが、本論の結果は、その親族からのサポートを得るためにメディアが活用されている可能性を示すものである。

次に、中程度の都市度であるエリア2であるが、ここではメディアの利用とサポート・ネットワークの間には、有意な関係性はみられないという結果になった。一方で、地縁的な「ご近所の知り合い」や「ママ友」とのつながりの量は、ほかの地域に比べても豊かな傾向があった。つまり、この地域はわざわざメディアを使い、物理的・時間的制約を超えなくても、少なくとも子育て世代にとっては、地縁的なつながりが豊かだと考えられる。この地域、具体的な地名を出すのであれば、埼玉県川口市や神奈川県川崎市などは、基本的に「徒歩」で生活が完結できる地域である。また、就業形態も都市度が高い地域に比べフルタイム勤務者数は少なく、働いていたとしても職場までの距離が近いことが予想される。また、密集度も高いため、地域の拠点で、地縁的な関係を持つ人々と顔を合わせる回数も多いのではないだろうか。

最後に、都市度が高いエリア3では、メディア利用とサポート・ネットワークとの関係性が深いという結果になった。「地縁」以外の選択的な関係においてメディアが使われており、メディアが様々なつながりの質を向上させる役割を担っていると考えら

れる。これは、人口密度の高さによる「選択肢の多さ」とその選択を行うためのツールとしてのモバイル／ソーシャルメディアの役割を示しているのではないだろうか。地縁的なつながりは、エリア2と同様に対面的な交流の中で十分維持できる環境にあり、わざわざメディアを使う必要はない。一方で、エリア2よりも公共交通機関が発達しているため移動が容易であり、徒歩圏に縛られる必要もなく、物理的に人間関係を広げることができる。その広がった人間関係の中での選択を、モバイル／ソーシャルメディアなどを通じて行っていると考えられる。

7. おわりに

本論では、子育て期の女性（母親）の日常生活における様々なサポートの供給源として、個人が持つ社会的ネットワークに着目し、その維持・構築におけるモバイル／ソーシャルメディアを中心としたメディアの役割が、地域の特性、特に都市度によって異なるのかについて検証した。インターネットを介した質問紙調査の結果からは、あくまで傾向程度ではあるが、都市度の低い地域（エリア1）において、モバイル／ソーシャルメディアは血縁・地縁などの非選択的な関係との間に相関関係がみられ、都市度が中程度の地域（エリア2）では、サポート・ネットワークの維持・構築とは、ほとんど相関関係がみられず、都市度が高い地域（エリア3）においては、多様なネットワークの構築と維持との間には相関関係があることが明らかになった。これらの結果は、メディアの普及が、社会環境によって異なる意味を持つ可能性を示している。

本論は試論的な検証であり、上述した知見をさらに確かなものにするためには、大規模な量的調査と、要因を吟味するための多変量の解析、各地でのフィールドリサーチが必要不可欠である。量的な分析の面では、今回3つに分けたエリア分類の妥当性も、さらに大規模な調査結果を使って、具体的なデータから対話的に検証する必要がある。また、統計的結果の解釈の面では、詳細な地域特性を考慮した上で、個別具体的なフィールドワークやインタビュー調査の知見を用いて、より確度を高める必要がある。特

にこのようなインターネットを活用した調査では、データを取得することが難しい人口密度500人/km²を下回るような過疎地区などは、質的な調査手法を活用する必要があると考えられる。

謝 辞

本研究はJSPS 科研費15H03419の助成を受けたものです。

注

- 1 夫や両親など規模があらかじめ定まっている属性のつながりもある点などを考慮し、規模と信頼度の質問では、つながりの属性を示す選択肢が一部異なっている。

参考文献

- Fischer, C. S., 1982, *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, University of Chicago Press. (=2002, 松本康ほか 訳『友人のあいだで暮らす—北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社.)
- Wellman, B., 1979, "The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers" *American Journal of Sociology*, Vol. 84(5), 1201-1231. (=2006, 野沢慎司ほか 訳「コミュニティ問題—イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司 編・監訳『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 159-204.)
- 天笠邦一, 2016「子育て空間におけるつながりとメディア利用—社会的想像力の喚起装置としてのスマートフォン」富田英典 編『ポスト・モバイル社会—セカンドオフラインの時代へ』世界思想社, 108-124.
- 天笠邦一, 2010「子育て期のサポート・ネットワーク形成における通信メディアの役割」*社会情報学研究* Vol.14(1), 1-16.
- 岩田考, 2014「ケータイは友人関係を変えたのか—震災による関係の〈縮小〉と〈柔軟な関係〉の広がり」松田美佐ほか 編『ケータイの2000年代—成熟するモバイル社会』東京大学出版会, 171-200.
- 久保桂子, 2001「働く母親の個人ネットワークからの子育て支援」*日本家政学会誌* Vol.52(2), 135-145.
- 木暮祐一, 2015「都道府県別スマートフォン利用率格差の要因」(<http://blog.postco.jp/archives/11419>, 2017/11/1)

取得)

関井智子ほか, 1991「働く母親の性別役割分業観と育児
援助ネットワーク」家族社会学研究 Vol.3, 72-84.

総務省, 2017「平成 28 年通信利用動向調査の結果」

(http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/170608_1.pdf, 2017/11/1 取得)

総務省統計局, 1996, 「人口集中地区とは」

(<http://www.stat.go.jp/data/chiri/1-1.htm>,
2017/11/1 取得)

辻泉, 2010「地方の若者・都市の若者—愛媛県松山市・
東京都杉並区 2 地点比較調査の結果から」松山大学
論集 Vol.22(1), 443-465.

辻泉, 2003「携帯電話を元にした拡大パーソナル・ネッ
トワーク調査の試み—若者の友人関係を中心に」社
会情報学研究 Vol.7, 97-111.

野沢慎司, 1995「パーソナル・ネットワークのなかの夫
婦関係—家族・コミュニティ問題の都市間比較分析」
松本康 編『増殖するネットワーク』勁草書房.

原田謙・杉澤秀博, 2014「都市度とパーソナル・ネッ
トワーク—親族・隣人・友人関係のマルチレベル分析」
社会学評論 Vol.65(1), 80-96.

松田茂樹, 2008『何が育児を支えるのか—中庸なネッ
トワークの強さ』勁草書房.

宮田加久子ほか, 2006「モバイル化する日本人—パソコ
ンとケータイからのインターネット利用が社会的ネ
ットワークに及ぼす影響」松田美佐ほか 編『ケータ
イのある風景—テクノロジーの日常化を考える』北
大路書房, 99-120.

(あまがさ くにかず 現代教養学科)